サブジェクトライブラリアン育成と課題：企業図書館

手塚 久男

司書資格を有し、情報の収集、情報発信、レファレンス業務を本務としている人をサブジェクトライブラリアンとするならば、非常に数は少ないが、各企業によって今一番必要とされ、大事にされる人材だと思われる。

本論では、東芝研究開発センター図書館で取り組んだ電子図書館システム、企業内図書館横断検索システム、企業内図書室間の情報共有システム、WEBによる情報発信の運営、CSRへの貢献、レファレンス、新刊図書、名著の紹介、書籍の廃棄など業務改善を紹介するとともに、その業務改善に果敢に挑戦することで、サブジェクトライブラリアンと呼ばれてもおかしくない人材も育っていることを報告する。

キーワード：企業図書館、ライブラリアン、サブジェクトライブラリアン、業務改善、電子図書館システム、横断検索システム、情報共有ツール

１．はじめに

金沢工大では、大学・高専の各教育の専門分野を代表する教員でサブジェクトライブラリアンを構成し、所属分野における講義・研究の他に、図書館の企画、資料・情報の収集、レファレンス業務を行っているとして、初代館長が世界で初めて創設した制度だとしている9)。

それでは、企業においてサブジェクトライブラリアンとはどのようない人ができるのだろうか。金沢工大的例に倣えば、図書館に関係しているが、日頃は研究・開発を行っている研究専門の人達なのか。それとも、その企業にとっての広報部門、企画部門、情報システム管理部門、専門図書館など、所属は異なっていても、司書資格を持ち、戦略的かつ専門的に情報を日々扱い、その企業の運営に関与している人達なのか。あるいは、企業図書館に所属し、資料・情報の収集、情報発信、レファレンス業務を実際に行って、ライブラリアン（スペシャルライブラリアン）なのか。

各企業において、司書資格を有し、情報の収集、情報発信、レファレンス業務を本務としている人をサブジェクトライブラリアンとするならば、その数は非常に少ないと思われる。また企業の専門図書館の中で、専任のサブジェクトライブラリアンを役職として置いている所があるのかと問われれば、筆者の知る限り、まだ聞いたことがない。

金沢研究開発センター図書館の中には、司書資格を持ち、ライブラリアンから育って、現在では社内企画部門、情報システム管理部門で戦略的な業務を担っている人がいる。彼らの役割については機密性も高く、残念ながらここでは紹介できない。私としては、企業におけるサブジェクトライブラリアンとはそのような人たちを指すと考えている。

そこで、当初のテーマであるサブジェクトライブラリアンの育成と課題からは、多少逸脱するかもしれないが、本文では当図書館におけるライブラリアンの業務や課題について紹介しつつ、企業におけるライブラリアンの育成といつてみて欲しいと思う。ただ、これらの議論を長い目で捉えれば、サブジェクトライブラリアンの育成につながるものと考えている。

２．企業におけるライブラリアンの専門性とは

企業のライブラリアンに求められる専門性については、中央大学 山崎久道教授の報告にくらいの議論があるので引用させていただく。

山崎先生は、米国のSLA（The Special Libraries Association）の報告書を引用し、これからのライブラリアンの有すべき専門性や能力をSLAの報告書にある「職業的」と「人間的」として紹介している。

Ａ．職業的能（Professional Competencies）
Ａ-１．情報資源の内容について専門的な知識を有し、その評価、選別を実行できる能力も備えている。
Ａ-２．親組織もしくは顧客の業務に適した特定分野の主題知識を有している。
Ａ-３．親組織の戦略的方向に調和した情報サービスを、便利に、近づきやすい、費用対効果のすぐれた方法で展開し、運用できる。
Ａ-４．図書室や情報サービスの利用者に対して卓越した指導や支援をすることができる。
Ａ-５．情報ニーズを評価して、付加価値のいった情報サービスや特有の情報ニーズに合致した情報商品を設計している。
A-6．情報を収集・組織化・配布するために適切な情報技術を使うことができる。

A-7．上級管理職に対して、経営学的手法に動員して、情報サービスの重要性を伝えることができる。

A-8．親組織の内外における情報利用。もしくは個々の顧客の情報利用のために特別の情報商品を開発できる。

A-9．情報利用の結果を評価するとともに、情報管理に関わる問題の解決についての調査を実施できる。

A-10．変化するニーズに応じて、情報サービスを絶えず改善して行くことができる。

A-11．上級管理職の組織の有効な一員であり、組織全体に対する情報問題のコンサルタントである。

B．人的資質（Personal Competencies）

B-1．情報サービスのための優れた精神や手法を有する。

B-2．図書室内外で、常に新たな戦略テーマを探し出し、新しい事業機会を考える。

B-3．壮大なビジョンを有する。

B-4．共同や連携を模索する。

B-5．相互の尊敬と信頼を醸成する環境を作り出す。

B-6．効果的なコミュニケーション技術を有する。

B-7．他人とチームの中でよい状態で働くことができる。

B-8．指導力を発揮できる。

B-9．重要な問題について計画を立て、優先順位を与え、さらに焦点を絞ることができる。

B-10．自らの生涯学習や個人のキャリア開発を行っている。

B-11．個人としての経営管理能力を有し、新たな事業機会を創造している。

B-12．専門家のネットワークと統一の重要性を理解している。

B-13．変化しつつある環境下で柔軟性と積極性を保っている。

SLA レポートでは、これらの項目を集約し、まとめることにより、ライブラリアンの専門性や能力・資質について、以下のように示唆している。

1）情報コンテンツについての知識が必須であること。

2）ことばの本来の意味での「情報処理」が必要スキルであること。

3）事業家やコンサルタントとしての能力・才能が求められること。

4）人間関係の維持や指導力が不可欠だとしている。

山崎先生は、これからライブラリアンは、失敗を恐れ
ないチャレンジ精神と、情報資源の内容および情報サービスについての新しい知識と経験が必要だとしている。

これに述べられた要件の多くは、ライブラリアンのみに限らず、ほとんどの部署においても当てはまるものだろう。どの部署でも、現状に満足せず、常に業務改善を心がけていって、提案ができる人材が求められている。良いアイデアは、通勤電車のつまりにかかっている時、とか、夢の中で、とか聞きることがある。しかし、アイデアというものは、何の問題意識を持たずに、日常の業務をだんだらでこなしている中からは生まれてくるものではない。ヒラメキは、場所がどこであれ、潜在的に課題解決に向けて問題意識を常に持っていて、普段から蓄積・収集していきたられた知識と経験があるからこそ、脳がリラックスして固定観念から開放された時に、ふと浮かんでくるものである。

日頃の問題意識がなければ、貴重な調査データもゴミと同じである。

３．株東芝 研究開発センター図書館の概要

当図書館は、企業の図書館として、人間社会に価値ある技術・製品を提供するべく、東芝グループの事業や次世代の製品の核となる最先端技術を担う、研究開発センターの研究者に寄与したサービスの提供および東芝グループ全体をユーチューブとして技術情報の提供を行っている。

当図書館の業務は、大きく分けて「情報提供サービス」と「研究支援サービス」からなる。

研究開発センター図書館の位置付け

このうえで「情報提供サービス」の役割は、世界のあらゆる情報ソースから、研究者や技術者に適切な情報を迅速かつ確実に提供することである。

従来、図書館の扱う情報資料としては、冊子体が主であり、供給方法も限られていた。しかし、最近の IT 技術の進歩とインターネットの急速な普及に伴って、情報の形も電子化へ向けて大きく変化してきている。電子化は単に紙が電子媒体に置き換わるのみでなく、情報の流通や検索方法といった情報供給のあり方全体に対する革新を促進している。その中でこれらの情報の如何に研究や技術開発に有効に利用していくかが、今後の図書館の果たすべき重要なポイントと考え、電子図書館システムを作り上げていくべきである。システム的にはまだ十分なものではなく、将来に向けてより進化したシステム構築を目指している。

また、「研究支援サービス」では DTP（Desktop Publishing）チームによる研究コンテンツ作成、英文校閲や翻訳、文献複写、PPT（Microsoft Power Point）、図面などの印
4. 企業における専門性を持ったライブラリアン の役割—当図書館の場合

それぞれの企業の専門図書館の承っている状況やミッションは、千差万別である。図書館全体が別法人となっているところもありますが、ライブラリアンの多くを業務委託や派遣社員で務めているところ、少人数のスタッフで運営しているところなど、企業の図書館を取り巻く環境も徐々に厳しくなされていきている。

このような状況の中で、企業図書館として専門性を持ったライブラリアン、すなわち、専門のスタッフをおけるところ、限られた企業とされている。しかし、大小の差はあっても、その役割や機能は同じである。サンパーソン・ライブラリアンにおいても、図書館の企画・運営、資料や情報の収集、レビュー等業務など、図書館を中心に求められるニーズによって、限られた人材資源を最大限に活かして各種サービスの提供を行わなければならない。

当図書館のライブラリアンたちは、日常の図書館業務を遂行する中でOJT(On the job training)を通して仕事感覚を覚え、日々切磋琢磨してスキルの向上を図っている。また、研究者が定期的に行っているような研究報告会・成果発表会等と同様に、ライブラリアンにも、日々の業務の中で気づいたこと、日頃暖めていた意見を発表し、提案する機会を設け、全員で討議し情報の共有化に努めている。たとえ新入社員であっても、越すことなく、大切だと思えることは進んで提案できる雰囲気作りが大切である。昨年も派遣社員の意見が発端となって、長年の懸案であった書棚の移動を館長総出で実施し、図書館利用者から感謝された。

予算など、様々な外部的要因からの制約もあるが、良い意見・良いアイデアを積極的に吸収し、極力取り入れることで、ライブラリアンの成長を促し、図書館の発展に結びついている。

昨今の図書館利用者の複雑多様化する要望にいかに応えられるか、そのスピードに負けない業務そのものの変革、組織改革といっか見えやすい部分だけに留まらず、組織の文化、チーム力といった目に見えない領域においても、専門性を持ったライブラリアンが果たすべき役割には非常に大きなものがある。そのような専門性を持ったライブラリアンたちが大きい方、また、人間異動等で他組織に移れた他に新しい組織の中で戦略的に活かされてこそ、企業における専門図書館、いわば組織内における企業の発展、変革を支え、社会貢献に寄与していくことができると考えている。

4.2 電子図書館サービス

図書館にとって、最近のコンピュータやIT技術の進歩とインターネットの急速な普及は、電子図書館サービスや多様なコンテンツの開発など、図書館サービスの革新の機会を与えるものとして捉えることができる。そして、これらにいかに戦略的に取り組まか、現代のライブラリアンにとって重要な課題になっている。

図2 Web電子図書館システムトップページ

当図書館では、2000年2月から、東芝会社サービスとして電子図書館サービスを開始し、コンテンツや機能の充実に努めている。電子ジャーナルの契約誌数は、当初は400タイトルであったが、現在は雑誌300種類以上にアクセス可能となっている。

4.2.1 電子ジャーナル

電子ジャーナルは従来の冊子の利用に比べ、はるかに利便性が高い。書誌情報だけではなく、検索結果から、さらに抄録、全文まで見ることができる。またネットワークにつなぐことができれば、実験室や自宅からでも利用が可能である。

ただし、主要な雑誌は料金購読であり、每年倉上げが続き、契約もままならない状況もなっている。価格は、企業の規模(人数等)、購入実績、あるいは書店による異なり、ライセンスについては℗届願ライセンス、マルチライセンス、ペーパービューなどがあり、価格である。

また、アクセス方法も、無料ジャーナル以外は、出版社との契約によって、IDパスワード方式でもあり、サイト認証方法もある。不正アクセス防止、契約遵守のために、アクセス環境も利用者の個人認証とプロキシサーバの設定などで工夫をはかっている。

電子ジャーナルを契約する担当者には、その企業の事業を理解し、社内の各図書室、利用者の要望を聞き、予算との整合性をいかにとるかといった利用の最適化へ向けた作
図3 DOIリンクボタン

業が必要となる。また、他の企業図書館との連携を含め、コンソーシアム契約ができないか、などといった新しい方策の導入も必要となってきた。

さらに、必要とする情報に容易にたどりつきめるよう、われわれの図書館ではINSPEC（IEEEが作成している物理学、エレクトロニクスなどの文献データベース：書誌情報、抄録などを収録している）と呼ばれるデータベースを導入している。

INSPECの検索結果にDOI（Digital Object Identifier）情報が収録されている場合には、リンクボタンを表示し、本文（PDF）に容易にリンクできるようにしている。また本文リンク情報が収録されていない場合には、文献抄録依頼ボタンを表示することにより、その場で図書館への抄録依頼を可能にする工夫をしている。抄録依頼があった場合には、後日抄録物を郵送で配送する。

最近では、INSPECで検索式を登録しておくと、週1回のサービスとして検索結果がメールで届き、収録内容にDOIがあればリンク先へのとリンクできる。SDI（Selective Dissemination of Information）サービスも開始されている。

これらのシステムは、ライプラリアンの失敗を恐れないチャレンジ精神とIT関連知識を基に構築し、システム運用やネットワークの構築を担当する他部署との連携から構築できた成果である。この電子図書館システムの開発チームは、その成果を認められ、親組織である研究開発センター所長から業務表彰を受けた。顕著な成果が出たときには、組織を上げて賛賛すると共に、その成果に見合った処遇を行う必要があることは言うまでもない。

図4 Web情報共有ツールのトップページ

組織としての側の議りは、年2回の「全社図書室担当者連絡会議」で行われた。

最近では、情報の共有化を含む、日々のより緊密なコミュニケーションをとることを目的として、安価なグループウェアソフト（カバーウェブサービスが市販しているWeblyGo）を利用したエルフォーラム（EL-Forum）という情報共有の場を構築して運用を始めた。

エルフォーラムでは、基本的に事業場間の組織の壁がなくなり、図書室間の連携が可能となり、全社レベルでのデータベース構築や電子ジャーナル契約、図書の相互利用などについて検討を行い、フォーラム参加ライプラリアンが意見を述べ合う場になっている。

4.3 WEBによる情報発信の運営

インターネットを活用した情報収集が飛躍的に伸長する中で、東芝研究開発センターの社外向けWebサイトでは、研究の成果を紹介すると共に、Webブラウディングによる東芝ブランドイメージアップを目的とした情報発信を行っている3)。

Webサイトの目的は、必要とされる情報を、いかにわかりやすくスピーディーに提供できるかということにある。情報発信のためにはすら著る原稿をかき集めているとは、タイミングを逃してしまう。従って、Webブラウディングを行うためには、まず企画の準備がかかる。インターネット上の情報共有のためのデータベースを構築し、業務の効率化を支援することも重要になる。これからのライブラリアンには、このようなブラウディングも必要とする。

そして何よりも、ベースに調和や協力を目指すという社会の協力体制がなければ、ブラウディングを推し進めることはできない。この業務も企業・組織に密着したライブラリアンでなければ不可欠な業務だと思われる。

4.4 CSRへの貢献

昨今「企業の社会的責任」（CSR=Corporate Social Responsibility）への関心が高まっている。研究開発センタ
4.5 研究支援サービス

4.5.1 レファレンス

主に文献調査に対応しているが、現在は材料・デバイス系の研究者への対応が多く、IT系の研究者は図書館そのものの利用が減少している。IT系の研究者の中には、雑誌情報より研究室での出張報告、研究報告書が真に重要な情報源であり、雑誌情報は自らの研究再評価の尺度でしかない、という人もいる。

また、IT系の情報（マニュアルが多い）は変化が激しく、重要な情報は研究者の頭の中、あるいは資料としてあるが、機密性があって、社内資料として目にふれられないところにある、という人もいる。国際学会などの個人間の会話が重要な情報源であり、またデータベースに対する十分な知識がなくても、研究者自らがGoogle、Yahooなどで簡単に情報取得、リサーチできる状況ともなっている。

高度な検索をするのでなければ、サーチ（情報検索技術）が代行検索する機能級備している。研究者の新入研修では、真に必要な情報を、どこか、いかにして取得するかという点を指導している。

昨年、研究所に配属された新入社員に対して電子図書館に関する教育を実施した際に、アンケート調査を行った。その中で、自分自身のテーマに関する情報収集の際のどのような手段を使いますか？と問いかけると、研修前には

1位 一般サイトのサーチエンジン（google、goo、yahooなど）
2位 周囲にいる人の紹介
3位 文献データベース（INSPECなどSDIサービス）

4位 研究開発センター環境報告書

5位 学会・出版社のサーチエンジン（google、goo、yahooなど）

6位 周囲にいる人の紹介

7位 関連する資料をピックアップ

これからの研究効率を上げるためにも、情報が溢れている状況の中で無駄な検索を極力削減し、真に必要な情報を鮮度良く取得したい、という思いが伝わってくる。図書館のホームページの中の新たな情報方法などの情報を掲載しているが、日々の業務に忙殺されている中堅研究者・新入研究者への指導が課題となっている。

4.5.2 英文校閲・翻訳

所内の研究者に限定したものではあるが、研究開発を促進するためにも、投稿論文や国際会議発表前の英文校閲等のサービスを行っている。英語の上での問題で返却されることはないよう、元研究者の協力も得て、論文の構成・論理性などに関して助言を行っている。この業務を、研究者に密着した有能なライブラリアンでなければ困難な業務だと思う。
4.6 藏書管理

4.6.1 新刊図書、名著の紹介

IT化、情報化と新しいことを創造していく風潮のみ
がクローズアップされている現在であるが、これまでの先
輩が築きあげてきた宝とといえる蔵書を再活用し、継承し
ていくことも重要な業務ではないだろうか。「継承なくして
創造なし」という言葉を聞いたことがある。知の館である
図書館、先人が築き上げたものを確実に引き継ぎ、そして
新たなものを加え、新しい文化を創造していくことが重
要な課題である。

当図書館では、2004年4月から、閲覧室の入り口付近に
新刊図書に名著を陳列するコーナーを設けた。名著コーナー
には、各方面の古典ともいえる名著（洋書が多い）を元研
究者であったライブラリアン自らが選定し、自分の専門分
野の名著には一度目を通じてほしいとの願望をこめた、要
約（和文）を作成して配架している。歴史的に貴重な名著
も多く、蔵書の新たな活用方法として好評を得ている。

新刊図書購入の選定については図書委員にも協力を仰
ているが、ライブラリアンの真価が問われる業務である。

4.6.2 書籍の廃棄

書籍の保管場所不足し、外部保管を余儀なくされている
企業図書館も多いのではないかろう。当図書館において
ても、毎年新規購入・寄贈される資料が書庫全体の約5
％を占める状況であり、蔵書差し替えのための、書籍の保存
方法の見直しを2000年に行い、廃棄（除籍）の基準を制定
した。

一旦廃棄された図書は復帰することはまずないから、書
籍の廃棄には、新刊図書購入にも増してライブラリアンの
真価が問われる。永久保存すべきタイトルの洗い出し、
利用実績からの保存資料の見直し、各書籍の情報価値（特
許公知知識課題／侵害情報）などの検討を経て、外部図書
館の利用に除籍が可能か、再契約して廃棄基準を制定した。
これら一連の作業を進めるに当たって、ライブラリアンの
担う役割は大きい。

廃棄基準にしたがい作業を進めたが、大変な労力と精神
的な苦労が伴うことを実感した。やむをえない除籍におい
ても、外部機関への寄贈など再利用される道を考えていく
必要がある。当図書館の場合、廃棄資料の多くは神奈川県
立川崎図書館に寄贈し、デポジットライブラリーで保管・
活用されている。

5. 当図書館におけるライブラリアンの育成と問

題

すでに述べてきたように、当図書館のライブラリアンた
ちは、いわゆる一般社員としてのスキルアップ研修を受け
た以外は、OJTを通じて、日々の業務の中で切磋琢磨し、
個人のスキル向上に図っている。ただし、本人の意欲にも
よるが、WEB教育研修など、外部の講習への自主的な参加
を積極的に行っている。

もちろん正社員の他に業務委託・派遣社員の活用も重要
である。当図書館においても、業務委託・派遣社員の比率
が増えつつあり、彼らに対する教育も課題となっている。
従来の業務委託は、印刷・複写・OCR入力・配信など単純
作業が主であった。しかし近年では、社内技術情報誌の発
行、新刊洋書の日本語要約作成、英文校閲の査読などの業
務を委託するようになり、元研究者であった方々にお願い
している。

派遣社員は、即戦力として図書・雑誌の受け入れなどの
ルーチン業務を担当しているが、課題によっては業務改善
のチームにも加わっていただき、サービスの品質向上をは
っている。現在は、ライブラリアンとしての経験や潜在
力が重要で、研究者と密着したライブラリーサービスなどにつ
いては、まだ派遣社員に対応させてはいないが、今後の図
書館サービスの維持・向上のためにも、彼らをどのように
育成していくか重要な課題である。

6. おわりに

冒頭でも述べたように、司書資格を有し、情報の収集、
情報発信、レファレンス業務を本務としている人をサブ
ジェクトライブラリアンとするならば、非常に数は少ない
が、各企業にとって今一番必要とされ、大事にされる人材
だと思われる。

インターネットの普及が進み、WEBによる情報発信か
ら、企業と顧客の接点として、顧客向けの商品直接販売も
実施する状況になっている。そうした中、戦略的に情報を
捉え、広報部門、企画部門、情報処理部門にとっても、WEB
のコンテンツ作成、情報発信、各種調査分析能力などを習
得したサブジェクトライブラリアンが存在すれば引っ張り
たこになると思われる。

本論の中では、サブジェクトライブラリアンの育成を、
当図書館でのライブラリアンの育成に置き換えていたが、
当図書館で各種業務サービスを行う中（OJT）で、サ
ブジェクトライブラリアンと呼んでもおかしくない人材も
育てている。

筆者が思うに、どのような業務に就いたとしても、問題
のない部署、問題のない業務などどこにもない。問題が見
つからないとしたら、それはそのだが成長を使った職場
か、問題を見つける感性が欠けているのかどちらかである。
発展の余地が残されている限り、意欲を持って事にあたれ
ば、至る所で不備な点が目につく。要は、それらの問題点
を見つけるかどうかである。問題点を見つけ、改善し
ていくには、その仕事を分析し、幅広い知識の中から最も
合理的なやり方を工夫し、標準化していくことが必要であ
る。これからの企業業者は、限られた狭い範囲でのスキヵ
ボではないやまない。自分が起業に努めている方は、おの
ずから教義も身に付いていくが、直接関係事の仕事以外に
ついても幅広い知識を収録することができる。常に業務改
善を心掛けいる人は職場でも好まれ、その人自身を伸ば
ることになる。

企業の図書館で働く方々には、自分の強みと弱みをより
多面的に認識し、キャリア開発、スキルアップを日々努め
ていただきたいと考える。そして、社内外に通用するプロ

— 392 — 情報の科学と技術 55巻9号 (2005)
Special feature: Subjects Librarian. Subject librarians (Corporate library), Hisao TEZUKA (Chief Specialist, Library Corporate Research & Development Center TOSHIBA CORPORATION, (1, Komukai-Toshiba-cho, Saiwai-ku, Kawasaki, 212-8582 JAPAN))

Abstract: A subject librarian is a qualified librarian engaged in the gathering and dissemination of information, and reference services. Although there are few subject librarians at companies, they are human resources in great demand.

This paper introduces activities of the library of the Corporate Research & Development Center of Toshiba Corporation that have resulted in improvement of its operations, such as an electronic library system, a cross-file searching system covering all in-house libraries, an information sharing tool for in-house libraries, Web-based dissemination of information, contribution to CSR, referencing, introduction of new publications, recommendations and disposal of books. Also, the paper reports that tackling improvement of operations has led to the fostering of human resources of a comparable level to subject librarians.

Keywords: corporate library / librarian / subject librarian / improvement of operations / electronic library system / cross-file searching system / information sharing tool